武藏國の歌文

巻上

へ13
3582
5

門へ13
號 3582
巻 5

早稲田大學図書館
昭和35.2.2 購入
藏書

復仇文藏鐙卷之五

二度乃身賣

おなぬさの曳る數多の遊女も信かを限ふいあるゝ
も何時しらあざなる花街の風俗ふ馴る浮氣薄情乃人こゝ
なりぬ然ども又意氣地を磨ぬ貞操を守る者かをるも
あるゝ偖も大磯の遊君妻木八度堀宗三郎ふ見へしより
さるゝ紅赤縄ふや二世の契をとゝめ堀が母とあゞ〻て見を
我母と云觸し一軒ゝ小屋と借ゝ住しめ米薪塩噌の代を

貢ぎ其身の衣類掃笄を賣拂ひ年とさく切增く難儀
ハ宗三郎が母ハ深く悦び其身も人の衣服を縫あらひ病
人の看病ふ雇ひ女ふても妻木が肩を休人ともなりたが
宗三郎が使をのゝ待ふふ月日ふ関守ふく早一年あまり
成過せども風の使もおゝざれぬ母も妻木も神仏ふ祈
誓とうけ首尾よく本意をとゝげゝ上帰ゆう守ゝもの
と祈ぬ隙もなりゝ。越ぬ両人が誠心を天道も憐
ゆゝ鎌倉殿の御内人ふ下川辺三郎右衛門と云武士

不図大磯へ通りあて妻木を呼むゝ酒の酌をとゝ世ゝ
が明深くなるふつけ妻木が堀宗三郎の母を養ゝとと
ゝ深く感じ傾城推女ふも你が如ゝ貞操の者ふ有
ゝるふ我も堀が復仇ふ出ゝ由ハ粗ゝ義をゝゝ
ざるふ勇敢と云ゝ我你が身を購えさせんゝ心乃沢ふ
其姑を艱よとて遂ふ購身ゝ其代暇を遣ゝゝゝふ
で妻木ハ深く恩を謝ゝ家翁ゝあ朋輩の嫖妓ふ暇ゝ
ゝゝれで各ゝ少くふ餞別ゝて大門まで送ゝ出ゝ妻木

八籠を漏さる鳥のごとく悦び勇み堀ゞ母真弓が宿へいそ
有り〻変と語られば夢ゝと許悦く嬉し涙ふるふる妻
木が曰もそは若衆を道きられば、いざ、是より都へ上ると一ふ八
夫の音信を安合し。二ふ八茶屋の有所を尋ぬべしとて
ふゞ真弓深く悦び屋を明て旅ぢたく調へ都とて
上ると急ぐ妻木八本都の産まれて父母八早世ふかれども尚
縁者のあるふたりて小屋を借りて。真弓八例の賃業
し妻木八茶屋の往義ふ便ある方へ奉公せあとて真弓と

商議しるふ真弓が曰都ふ八祐甫と云ふ高名茶屋の依司
あり是が方へ奉公しあゞ方一知まず死ふ抵とりふより妻木
実もとて人傳を頼。祐甫が方へ奉公を望るふ折よく茶の
間の女暇を乞て帰るもの奉公人を求るとれば祐甫
妻木と見さもとゝ見るふ容貌ちゞれられば大ふ意ふ合ふ抱
妻木ふ茶屋を教へ容ある折ふ八茶茂点さ世ゝふ原素利
發の性ふれば居る品ちやふ挙動るふゞ。祐甫いよ
感ド再雑得ふ却ひ。然ふ一日南都の茶人半井ト仙来

武蔵鑑五
三

武蔵鑑五
四

つとろれハ祐甫ゞ多年の得意ゆゑ是ハよく社とて茶室ゆ結
先自身茶を点じてもてなし其後酒者をもうけくろひ妻木を
敢人ゝて酒を勧めるホト仙數盃を傾て後云ふる八今般より
さるゝ別吏なるゞ我先年茶器をもとめ[illegible]が未ゞ嚢をもけゞ
往冬の口切ハ遣まく欲ゝ何卒此那ゝ以ゝ嚢ハ縫てもと
て宮ハ入ゝる器と荒礒とゝる錦の那ゝ我さ一出しゆ祐甫諾
して茶器を執出し熟視て大ハ驚たゞ此器ハ如何なる者ハ
買ゆ一や是社先達ゝ御觸のあゝ一ゝ賀家の重寶ゝる

勝閑の茶入なり此茶器ハ蜀江の錦乃嚢ゝ宮ゝ芸表
ハ堀越殿の自筆ゆ勝閑乃銘なゝびハ花押あり我故者て
親ゝ是を見ゝ其宮と嚢ハ如何なりゝとゝ
仙大ハ驚ゝ曰世ハ似ゝる器のなゝハ原来ゝる宮嚢
もあゝ熟と目利ゆゝと念我押ハ祐甫首と揮否此形の茶入他
ハ在吏を見ゞ御身此器と用ひゝ如何なる咎と蒙りゆゝも
知ゞと疾其責主ハ返一ゆゝとゝゆゝ仙額をなゞて曰実た
當所烏丸通下立賣なる道具屋ゝ市より五十金ゝ買

くれども昨年買し吏なれば今更返さんとくとも一應あて六貫
引まい是ハ迷惑ある品を買合せしゝと歎息して亡魂さう
木ハ先刻より両人が談話を安の須驚歎のまぶるを得ようと思ひ
結て安居しゝが此時祐甫ハ向ひ卒示の下吏なるゝ此茶入を吾
倘ハ買得させまゝとぞやと曰ふ祐甫心紛ひ此品を買とゝぞ忽
ち怒を蒙らんハ罪を犯して買とゝんとゝハ如何と問妻未着て曰
是ハ深く謂のいへども明白ハ迷ひ先茶入を買させまゝと望
むと仙が曰怒かも厭ど買人とあるゝ元金の内五両ハ指毛と

勝岡の茶入なり此茶器ハ蜀江の錦乃嚢ゝと宮の芙蓉
ハ堀越殿の自筆ゆく勝岡乃銘なるびハ花押あり我故有て
親く是を見ようとゝ長皆と嚢ハ如何なりゝとゝハゝと
仙大ハ驚あゝと曰世ハ仙なる器のなれハ原来さる管理裏
もあるゝ熟と思利ゆへと念ゝ押ハ祐甫首と揮否此形の茶入他
ハ在妻を安ぞ御身此器を用ひるゝ如何なる怒を蒙りゆゝ人も
知ゝ疾其責主ハ返しゆへとゝハゝと仙額をなでて曰実ち
當所烏丸通下立賣なる道具屋と市より五十金ハゝ買一

くれども昨年買し吏なれど今吏返さんといくとも一應ありて六貫
引まし是ハ迷惑なる品を買合せしなると歎息して忙然とす
木い先刻より両人の談話を密の須臾驚敵のまぐるを得ずとうと思と
結て安居ら迄ど此時祐甫ハ向ひ平示の下吏なるこ此茶入を吾
倘ハ買得させるべくぞやと曰ふ祐甫心紛ると此器を買とるぞ忽
ち怒を蒙らんハ罪を犯して買とるべんと加何と問妻木答て曰
是ハ深き謂のいへども明白ハ述ぶ先茶入を買させんと望
むと仙ぶ曰咎なも厭ど買人とるぞ元金の内五両ハ損毛と

四十五金ハて賣与ゆんといふぞ祐甫點首ぬ愚老引受此
者の所存なも安好ふたるこの中ぬ先器預ゆんとりふ其約
從ひト仙旅宿へ帰りぬ其跡ハて祐甫妻木ハ子細を問ふ
是ハ木身の上を包まぬ語何平原の賣主を紀しゆりいへと
涙とともハ頼とくれぬ祐甫大ハ驚ぬ偖ハ堀氏の内君なるる
やさぬ道具屋与市を紀して敵の所在を安ハ出し進せん
とて頼ぬ与市ぬ方へいり面談して事を紀ぬハ往来の修行者
ら買取れぬ何國の者とも志ぬ笛も袋もあるぬ告

々ふぞ祐甫猶其修行者の人相を変し乞帰く妻木ふ其
ゝ戎語れむ是うあらざ敵銀四郎ふてけだ行方ふれ
むかな此上ハ暇をるり〳〵金子を調へいんとりふぞ祐甫も
欲るとて許ぬ妻ハ真弓が宿へ立り皆一五一十とうるる
ふ直弓一度ハ悦び一度ハ憂し茶入ふ尋あ逢ハ嬉しくれども四
十五金を如何せんと同妻木も涙さ〻て女の身ハ悲しさを
俄ふ夕の金を得ばとりくども茶入なくてを敵を討得るとも夫ハ
埋木となるうあ〻れで這身を再び嶋原へ賣て其ハ身價ハ

て茶碗を買取ぞ〻へ為る主人ふ暇を乞く眤りひなりとり〻
ふぞ真弓ハあつと泣出是までの御身が深切さ世ふ有まじ
貞節なるふ今又二度の勤をさせ何そよそふ見〻る〻此
度の〻ハ思止てよとひたく涙ふむせびへね妻木も涙ふる
あぐら憶心弱ち度とのさ〻ふ夫の為ふハ金を捨ば例さ〻有
苦界ふ身を沈るハ物ハ数るふとて諫めそげば前ら嶋原へ
到り肝煎を頼て桔梗屋とりくる妓館へ身を五十金ふ賣其
金を得て真弓が宿へ立帰り御身此金を以く祐甫主ら方へ

うど
「身うりをするところの
きつさうんだいわさぐまるどやぐ
ぐらうえひまぐいるすーぐや
母
「いまふちどめあ
そのさのきんぜろ
うれのハうれーけれど
あんとそどの
つうあぐさ
りあうぐ

つま木
「なんとまるる
をちとのさあ
こさうぐこと
ぬちまれなく
そのうとて
ちやられを
うれうぐ
さびぐう
ーて
ぬさり
ませ

釣アヒ茶入を買取残る金を路銀として宗三郎主の行方を尋ねんとおもひ定めぬ。真弓ハ涙ぐましく御身ハ母子の守神なりとて謝しまふる。妻木ハ猶行末の吏といひつゝ終ハ嶋原へ二度の動ハ起々ハ世ハ稀なる貞操なりと世人感涙を流さぬハなかりけり

曾我皆乃復仇

去程ハ真弓ハ妻木が教の如く祐甫が方へ行子細をとき金子と出し茶器を求人と望ん。祐甫も妻木が苦節を感

且ハ真弓が漂浪を憐み茶器を賣与旅の准備を何くれと管顧しぬ。真弓ハ悦謝して立出何國と心あてもなけれども武藏なる浅草の観音を霊験あらたなりと聞て我子の行方を尋ぬるとて詣ゝ非人乃躰ハ身をたゝ吾妻とさゝて下ヲ下谷村へ著しぬ。深編笠ハ面を人と見も武藏をさして下ヲ下谷村へ著しぬ。深編笠ハ面を隠し武士の浪人乃草鞋錢を乞体ゆく家〻ハ立入覗しも吏ハ去れぬ。土人ハ大工荘兵衛と云人をあらぬをやと問ハ其

人ゝ曰実さる人あり臣ゞ去る四月ふ山本邑へ移住まゝり其村ハ此所を去る三里余まゝ〳〵の所へと教ゝれ宗三郎大ふ悦び直ふ山本邑へ尋行家ゝと窺ふ時ハ已ふ七ツ過なるが南方より番匠道具の笛ふうゝげ来る者あり宗三郎編笠の内より其面を見るふ紛うかたなく銀四郎ゞ実又荘兵湧なり宗三郎大ふ悦び見えず隠ふまゝ行其家をとゝと見定め銀四郎ゞ出る度もやとて日の暮まゝる迄物影ふ隠て窺ゞも其人と覚しき者も出されぢいまゝて踏込尋ずやとおもふ

否ゝ度ふまゝりて討ものとて六悔ともゝ色と胸とさまゝり猶終夜家の前後を窺ひ空しく其夜ハ明ふゝり宗三郎大ふ望をうしなひ斯て六人ふ姉しの人安を愛て又来んものとゞく山本邑ゝ去ゝる廷ふ前面しゝ六旬あまゝの女非入きゝまゝり何心なく其顔を見るふ豈たゝ人母の真弓なりゝれゞ大いふ驚ゝ急ふ編笠とぬぎゝて其面を見るふゝ真弓も驚ゝ面色変て已ふ討をゝけんとゝ宗三郎早く目結して制し袖と曳て古ゝる辻堂の内へともあひ扉をさゝゝゝめて宗三郎

壱とひとめ。おひけざよ母人さも妻木が情ら〻く云ー白石
御身と頭ずるら世ふ浅猿紀非人の体ふなりの〻ハ彼女ぐ見放
しまるら世ふやら〻問ふ真弓首とり。不ら〻嫁女の孝行貞節
ハ刻ふハ述ぐし。其ハ去ぐ〻ら〻ら紀。御身いまぐ敵ふめぐり逢ぐ〻宗
三郎ぐ曰其夷ぐくい此春瓚州金毘羅宮へ参詣せ乙と世船中
ぐく銀四郎ぐ面と乙ら紀ぐ如此〻〻と茶器の宮を買ーを
首とり。舞子の濱乃賊難兵庫の宿ふ〻ぐ〻ぐの下女澤子ふあひ
敵の所在と尋て武藏へ下里まぐ一五一十と結ぐれぐ母ハ安益ふ

歎息し。吾倘も你ふ別ー後ハ如斯〻〻なりと妻女木ぐ情あて大
磯ふ住ー條より。下川辺ぐ義心妻木ぐ苦節。二度嶋原へ身と賣
て茶入を買とり余金と路用へて武藏へ下里迫を結ぐ宗三
郎ハ感涙ふ袖をぬし先其茶器を見せ乙とて乞とり。熟と
乙ら〻ふ正真の勝関の茶入なれば大ふ悦び船も旅色より件乃
管とり出囊ふ茶器を安むらふ原来其品あれぐすれ
のとぐ紀るもふ宗三郎三度押ぐ紀ぐ茶器有ても品なくハ詮
なく管有ても茶器なくぐ其甲斐有まぐ紀ふ一度ぐ乙ふ

なりくる品の今日揃しも奇なり妙なり是ふ付ても妻木の操
ゝを有がゝるかゝて母子ともに又被殺ぬしるゝ宗三郎氣と屬し
已ふ名高きふ入ふ上八片時も早く敵を討く皈参の道を急
ぎるんとて母子とも非人の姿となり手拭ふく面を深く隱し
まゝも山木邑をさして往ふ時を七月十七日殘る暑さの衣をふ
涼しき風の吹よと見えるゝ風ハ漸ふ強くなり人家乃屋根
を吹まくるむりく然ふ山木村も近くなるゝ南の方より強く
と搖き者管笠を風ふとられ「と」と片手をとけてうつむ

歩を進りるゝふ暴風のあるゝ吹過ゝ風の爲ふ忽ち笠の紐
を吹きれ切駄て面を上飛散り笠をうゝ宗三郎母
と扶ゝ木蔭ふイて在るゝ今笠をとられる者の面をうゝ
年月尋る敵銀四郎なり何ふ少時も猶豫ハ為ぬ拭搜
つゝ捨夢ゝのけ木蔭より走ゝ近づいるふや大野銀四郎
堀宗三郎を見忘ゝりやゝ父の敵尋常ふ勝負せよと呼ハ
りゝ銀四郎ハ大ふ駭ゝ言の答もなく腰刀をぬゝと
抜て斬てゝる宗三郎もはく抜合ゝ五七合打合ゝる孝子

うるさいぞ
きさまら
ぶちのめすぞ
ぶつくさ
つぶやくなんぞ
弘法ぶみやのうらの
きんぶちのふしあなぶ
せよ

弘法ぶ
きさまらさいろうれよとぶいると
つまみとこのいもだし
みやるしめふろうちぶ
そうれんひろげ

ど憤怒乃鋒もるどく忽ち大野が二の腕をきてくふ斬を
さどく透へつけへく肩尖より胸板をけて斬下れだあつと叫
て尻居ふ倒ど仆たり宗三郎得たりやと飛かゝる仰さまふ押
仆して乗うを逐ふとめ弦をさしふる真弓ハ木蔭ふあり
て勝負いふゆとあぶそ只管観世音を念じるが此時あまり
の嬉しさふ不覚木蔭を出宗三郎でしうと感賞
を村の者どもハ先刻より遥うふ見物して居るふ已ふ苗
弦刺さる弦乃くく中ふも村長進そ出そも何故ふ刃傷ふハ及

ばれるやと処む宗三郎刀を収め是ハ又の敵を討者ふ
て地頭へ参を委細申聞れいとうとそ所ハ子細あり
し我们ゴ路しふんとそ所ふ番を附宗三郎母子を
伴ひ地頭の邸宅へ到を仇討のよし訟れば地頭何某宗三
郎母子ふ問ふし鎌倉なる多賀家へ斯と通達ふ及るふ
ふより多賀殿より迎ひの使者をさし越され宗三郎母子を引
ふを頓て御前へ召をれば宗三郎慎で勝負乃茶器を口し
し復仇乃始末を言上を多賀殿感賞あつく紛失乃

ゝり氏父の仇を討得さるゝ武運ゐ叶ゝ者なりとて先年上百石の加增を賜りゐれど宗三郎母子深く君恩を謝せり元の邸宅へ移り住古朋輩を招て悅の酒宴を設し借金子を調達して人を都へ上し妻木ゞ身を購ゝ國へ呼とりて新ゐ婚姻の盃をなし母子夫婦憂を釋じて喜とせしとぞ聞ひとゝゐ宗三郎ゞ孝心妻木ゞ貞節ゐよるところなりと諸人挙て是を賞し諸國ゐ其風説ゝ流れなりとぞ

復仇むさゝあづき巻五大尾

○前川文榮書閣新刻略書目

圓陵宮田先生著

皇朝戰略編　半紙本全八冊　定價金壹圓五十錢

此書い天慶の始め平の將門が亂と東國に起せし始り近く寛永の末島原の賊徒西海ゐ殊滅せられしに至る迄前後凡ゞ七百有余年の間名將、勇士、公戰、私鬪、豪傑、英雄、奇戰、妙略、跡の法則とおるべきを數多の史乘より撰ゞ出ゞ武學の用に備へたる者にして實に兵家の龜鑑たるべしと云つべし名將の勝を製そる術を覺り國家興廢の由る所以を知るべき者は此書に如かず

照陽高見先生著

續皇朝戰略編　半紙本全五冊　定價金七拾五錢

此書正編の世に行るゝ日に盛おゞ然れ共未近世の戰略を記するに至らゞ故に先生新ゐ續編の著あり其記そる所い文化年間魯西亞人の入冠に起り大壇れ亂馬闘鹿兒島の砲戰大和及ひ生野れ戰ひ水戸正奸黨の亂長防の役戊辰の初伏見淀川の一舉上野の戰爭甲、信、武、總、野、北越、奥、羽、函館の諸役佐賀台灣れ征討朝鮮江華島の提ゐ至る迄大小の諸戰を記ゝて洩すことおく陸海軍諸公の英武勳功各鎮台の偉烈等詳かゐ記載せり若一回卷を繙りゞ手の釋るに忍びざらんやす四方の君子幸ゐ顧み收く其ゝ意を

るを知り玉ふべし

清原重巨先生撰　清原重光先生校

草木性譜　附草木有毒圖說　奉書摺大本全五冊　定價金三圓

該書ハ山林田野に生する草木、花實、葉根と微細に寫眞して毎畫着色其眞を顯し目前實物と觀るに均しく加之記するゝ滋益、有毒、氣味、性分を擧げ和漢れ名稱出所と詳述したるは百物推理の方今興産家と始め植物試驗藥劑鑒別及ひ製藥家ゝ於て此書其參考ゝ闕くべからさる要書也

丹陰莊門熙先生編輯

新編詩學精選　小本全五冊　定價金七拾五錢

此書ハ四季及ヒ雜部ハ五卷に分ち上ハ日、月、星、震、風、雨、霜、雪ゝ下ハ江海、山川、森羅萬象、宇宙細大とゆく凡ゝ吟味に屬する作題ハ勿論晩今祭典、漁船車、電信等其尤も新調に適する珍奇雅正の作題と附して洩さゝとゆし其體裁たる紙面を兩段ゝ對別ゝ上段に熟字を揭げ下段ゝ韻礎を置き毎題和漢名家の絶唱と稱する作例を挿み且つ平仄譯假名と叮嚀に註明す是を以く刊行以來詩作楷梯の良書と呼ハれ江湖ゝ流布するゝと既に萬有餘部の巨額に及べり重刻ハ再三編者の榮譽書肆の僥倖深く感謝する所ゝり伏て冀くハ江湖の本書新識の吟客其誣言ゝらざるを推し最寄書房ゝ就て御購閲ゝらんとを企望す

丹陰莊門熙先生編輯

新編續詩學精選　小本全六冊　定價金壹圓五拾錢

此書正編ハ四季を主意とし編次す故ゝ他の景物ゝ至りては漏泄の失ゝらんゝとゝ恐る是ゝ因て天文、地理、人事、器賊、飲食、草木、百花、菓品、禾蔬、飛禽、走獸、鱗介昆蟲の十三門ゝ區別ゝ其體裁と專ら正編の義例に倣ひ只管ゝ作例を增し下段に後輩先進の五七言句及ひ聯句を揭げ置たれと吟場墨圃は勿論蓄席雅筵に提携すること便利に ゝて其功最も多し實ゝ正續兩編連理して無瑕完璧ゝる良書と云ふべし凡そ詩作に志ゝる諸彦の清玩とせば其攀援の助を爲すゝと少小ゝらず伏く請ふ世に慢然散布する詩作の諸書と同一視するゝく卷と繙て其金玉ゝる全本と知り玉ふべし

竹涯莊門熙先生編輯

詩韻含英異同辨增補以呂波韻大成　折本銅鐫全一冊　定價金拾五錢

此書ハ從來世に流布する以呂波韻より一層字數を增し冊首に時令及び花木、禽獸、鱗介の異名を載せ次に詩韻含英異同辨より平仄韻字若干と摘要し只管に詩作初學士の便益に供す世上に類書數多刊行し就中異編同名有之此書需めらる、諸彦と莊門熙編輯の以呂波韻と稱へ最寄書肆にて御求を乞ふ

阿陽堤大[illegible]

一解千金詩文幼學便覽　横本銅鐫全二冊　定價金卅五錢

此書ハ四季の景物花鳥風月等の部類に分ち熟字若干と揭げ平仄譯假名と丁寧に註明を實に詩文幷用の便益に供すること聊か表題ゝ不違珍書ゝり

明屠赤水著　東溪源謙校

考槃餘事　白紙摺明朝綴帙入小本全四冊　定價金七拾五錢

此書い支那歴世の書畫古法帖等の評論及び金石鼎彝文房の諸品盆栽瓶花香爐茶酒琴服等一切の物載く漏すことなし且り其品物の眞僞精粗と辨論し或と製造試擇と修飾との諸法と參記も實に文房書家必用の書あり

順堂奚疑先生著

書畫皆宜

白紙摺明朝綴小本帙入全三冊　定價金四拾五錢

書家必用の小冊諸君子常に机上に備置き玉ふて其の辨用擧て謂ふ可からず書題書題と始と一絶句聯句い云ふも更なり[illegible]別號數字類ゐ至て諸家の妙語を選て漏さず記したれば該書を披けく其自在を得ずと云ふことなし苟も書と玩ふの諸彦必携有益の書あり

吳縣顧祿鐵卿撰

清嘉錄

日本名居安原寛得樂校　半紙本全五冊　定價金七拾五錢

唐土の年中行事其國の風俗人情と詳載し民間の景物と精す學問の助とあり詩文を作るに甚だ益あり

宋林洪著　元羅先登著　吳縣顧元慶著

正續文房圖贊

白紙摺明朝綴大本帙入全二冊　定價金五拾五錢

○附十友圖贊

此書い支那歴世の文房諸品筆墨硯紙等より茶器香具の文房ゐ屬ぞべき器具百般其圖式を摸出す雅文著辭を載せたる珍書に玄て文士雅客と更なり賞鑒家にも必用の書あり

近藤守重編輯

金銀圖錄

半紙本全七冊　定價金壹圓五拾五錢

此書い往古よ之近世まで我國通用の金銀貨幣其正品と摸し品類を區別し着色玄て凹凸とも其まゝ顯したれい實に其眞物と視るゐ同く且位格時代年月相庭等と詳記玄たるを錄行を始め經濟家有志の必閲たる書あり

南陜富永讃撰

茶器名形篇

半紙本全二冊　定價貳拾八錢

此書は聚樂窰の家祖吉左衛門累世の系譜其造る所の茶碗及水指香爐花器等の圖と擧げ其傳記幷ゐ價位を附し購讀主の姓名と記して遺憾おからしむ苟も紹易の下流を汲む人は必ず其座右ゐ闕可らざる書也

秋山仙朴先生撰

當流基經大全

大本全三冊　定價四拾錢

此書は本因坊策元の直傳と記すもれふしく諸家の圍書圍基石置れ心得より都て秘傳妙術と惜ゐを記錄したれと圍碁と嗜む人は勿論假令ひ初心の人と雖も此書に據るときは置石定位の法を知り變化勝敗の理とさと之易く所謂定石しらずの域を逃脫するの善本あり

丹陰竹涯莊門熙先生編

墨客草園

白紙摺明朝綴帙入寸珍本全五冊　定價金壹圓

抑も墨場ゐ携帶して臨摹ゐ充る書多玄と雖も草字と集めて雅筵と求索に適するもの少し夫れ書は古人れ筆法ゐ據らざれば一點一畫筆を下そも婉雅ゐふを況んや草字ゐ於てをや編者此ゐ見るあり是を以て歴世十朝(漢、晉、宋、梁、陳、唐、宋、元、明、清)草聖の古法帖中最も純粹ゐる者に就き片冠の引法ゐより編纂しく六卷玄おし墨場必携の用ゐ供す乃ち古人を一堂に聚め手ゐ執り心ゐ談ゐるの快とゐさしむる書ゐして例[illegible]學ぶさるゐ幸に愛玩し玉は、家雞野鶩の俗體て脫し老頑狂僧の風神に入るも抑また遠しとせず是に於てや謹て江湖の草韻家に告ぐ

移石原田先生摹古及加筆

國畫芥子園畫譜

半紙本全二冊　定價金五拾五錢

方今文苑畫圖の書冊皆ゐ机上の簡便と競ひ江湖に刊行するもの多しと雖獨ぞ國畫の書に至ては未だ完全無闕おるもの蓋し多らざるおり今斯畫圖の如きと古今我邦畫工の巨擘三十餘名家の揮毫おるものを蒐輯しん物草木走獸飛禽百花魚介の六譜に分ち只管に唐刻芥子園畫譜の脉裁を效ふ之に憑て學

べは初學の士筆と下して其礙滯おきに至らん假令之を學ぶざる君子も幸に愛玩をたまい鬱憂を轉じ爽快の情に移らしむる珍書あり

越谷吾山先生輯

諸國物類稱呼

半紙本全五冊　定價金七拾五錢

方言

右越谷吾先生我日本國中經歷の際其土地の風俗人情より一郡一邑の訛詞迄委しく記載をく天文地理人事服食草木花果菜蔬飛禽器賊獸魚鱗介昆蟲及言語の諸門を分編して間々名家の諸國訛詞入りの唱歌狂歌連俳狂句等を挿みし古人未曾有の珍書あり

農具便利論

半紙本全三冊　定價金五拾五錢

此書は耕業に益ある諸器械を集錄し其便利を評論して近來流行のポンプの製作までも載せ記したれい農業の諸君に欠くべからざる實書あり

天狗房花鷹大人編輯

佳花餘薫　珍珍文粹

寸珍美本全一冊　定價金拾五錢

戲作者の巨擘馬琴京傳春水三馬等の諸先生を始め三十餘名家の最も面白き文章を輯めし小冊子を倣したれい狂文を綴るの御手本とおるべき小意氣の書也

狂歌堂四方眞顏大人閲　狂歌房酒月米人大人撰

四季戀雜　狂歌題林抄

小本全四冊　定價金六拾五錢

江湖諸大家の狂歌を東都の名高き狂歌房主人が撰び其上へ題毎の枕詞及び珍詞を大寄に掲載せられ玄煩る滑稽がましたる古今未曾有の珍書中の珍書あれど世の風流粹客達是非一部い御進め申すても御求めあらんことを乞ふ

契沖阿闍梨家集

漫吟集類題

中本全四冊　定價金七拾五錢

契沖阿闍梨い歌詞をの大家さるまで其道に遊ふ人のよく知ところなり此書を契沖阿闍梨の家集ゐして

四季戀雜幷に富士百首長歌等各々類選にしく一代のよみ歌を洩さず五千餘首をあつめし大秘書也

富草屋大人校正

袖中大和詞大成

寸珍本全一冊　定價金拾壹錢

無益の詞を去り當時用ゐることはを多く增補して附錄の歌の讀方を出く歌學初心の便利の小冊子とす

建綾足大人著　早川廣海大人補

增補歌文要語

小本全三冊　定價四拾五錢

古事記日本記延喜式和名抄萬葉集伊勢うつぼ源氏いちくぼ竹取その他の和書物語等の詞を部類に分ちて註解を加へ出所をりけし信切な書おれは和歌連俳と云ふも更おり和文綴るとも便利とおる珍書おり

芭蕉七書

小本全二冊　定價金三拾八錢

此書い行脚掟○二十五ケ條○十六篇○句合○嵯峨日記○奥の細道○發句集等此の七部の蕉翁秘書を合刊して同じ道に遊ぶ人の便とす

芭蕉附合評註

小本全四冊　定價金六拾五錢

翁一世の附合集蓼太の撰らみとかきーと委しく註解をて好者の爲ゐ其意をさぐをやすくを

俳諧李寄たね袋

懷中本全一冊　定價金拾八錢五厘

凡ろ俳諧初心の手引となる書數多あれど雖有來にて便少し此李寄本は四季詞草木鳥獸及ひ月の異名年中行事等都て註を加へ俳諧式法發句仕樣附句の用捨其外極秘傳故實を出せし初心必携の書おり

思之中村貞纂述　博愛梟白報閲正

頭書類語小學作文教授書

小本全五冊　定價金壹圓廿五錢

○初等科(一ノ卷)(二ノ卷)一ノ卷卷首に俗文要語活用問答、令正誤文、俗文復譯法等を掲げ次に日用單簡文百余章を編ル○二ノ卷卷首に俗語若干を掲げ次に四季贈答文、祝賀、悔吊文、電信文、公用文諸証文等數百章を載す

中等科(三ノ卷)(四ノ卷)(五ノ卷)三ノ卷卷首に作文要字和解を掲げ次ゐ雅文に俗語を挿を僅に三十字內外を以く一文成す○四五ノ卷紀、記事、論、說、題、拔、傳、序、祝文、吊文、祭文等數百編を載せ

南泉中村貞著述

開化農商往來

半紙本全一冊　定價廿二錢五厘

此書と農商家の心得日用器具の名目等と掲げ尋常の農商往來と異なり專ら暗誦に便ならんため五しれ句調ゑ綴り且習字にも用ひらるべき筆耕と撰みたれゝ世れ兒童一本提携ゑて其稗益と賞ゑ玉はんとを

西敬著書

畫圖入門

横綴本全十冊　一冊ニ付　定價金拾錢

西先生れ畫學に妙と得らきーと諸君の熟知する處なり今茲ゑ贅言せず此書と中小學校れ教則ゑ基き編述せる書にして直線法○曲線法○野畫○紋畫○器用物○家屋○花草○果物○禽獸○人物○等と顯し順序宜きと得彫刻鮮明なるとして教科用ゑ適當なる書と云ふべきなるゑ請ふ世に慢然散布れる畫學の諸書と同一視そるなく卷を繙て無瑕完璧なる良書ゑるを知ゑ玉ふべし

西敬纂譯

畫圖入門

幾何畫法　近刻

同透視法　近刻

同按影畫法　近刻

同三部圖式　近刻

此書ハ用器畫則ち幾何畫法按影法透視法等と詳述せる書ゑ為て教科用適當なるゑ勿論用器畫と畫字中必要の科にして各府縣教則目ゑ此科あるも未だ發見れ書を見ゑ依ゑ教則の順序ゑ隨ひ此書を出版す故ゑ只教科用のみならず工藝家ゑも必讀の書也

鷹嘴房吉著述

新選普通

作文必用

中本全二冊　定價廿五錢

手紙を認めるに解り易き為同意味の記かへと澤山ゑるし萬物の類語文章のイロハ引を載せ日用文と若干掲げる重寶の書也

鷹嘴房吉著述

新選普通

女用文章

中本全一冊　定價拾七錢

此書は婦人郵便はがきの認め易き短文を年始狀を始め種々の雜用に至る迄都く余章を掲げ頭に一々其文の類語と載せ容易に作文を得べき懷中便益の小冊子也

製本所
東京橋區北久寶寺
四丁目十八番地
市川源七郎

六号ノ五